

東丹生図の庚申塔

庚申塔とは「庚申さん」とも呼ばれ、主に江戸時代以降に全国的に広まった庚申信仰に伴い、各地で建てられた供養塔です。日本では、古くから十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）と十二支（子・丑・寅などのえと）を組み合わせた60種類の呼び方で年や月日を表していました。庚申信仰とは、60日ごとに一度めぐってくる庚申（こうしん・かのえさる）の日の夜に、三戸という虫が寝ている間に体内から抜け出して天に昇り、神にその人の悪事を告げ、その報告により寿命が縮まるという思想に由来する民間信仰です。そのため、庚申の日には三戸が抜け出さないように、庚申様を供養し、三戸に告げ口をされないように眠らずに夜通し語り明かす庚申講と呼ばれる行事が行われていました。

東丹生図の庚申塔は、東丹生図と西丹生図の字界付近にあり、鳥尾川にかかる丹生図橋を東丹生図方面に過ぎた辺りにあります。庚申塔はお堂の中にあり、石仏とともに安置されています。庚申塔の高さは約88cmあり、庚申信仰の本尊とされる「青面金剛」の姿が彫り込まれています。町内に残る庚申塔は、「南無青面金剛童子」と

いう文字が刻まれていることが多く、比較的数量が少ないものです。

さらに東丹生図の庚申塔で貴重な点は、庚申講で掛ける青面金剛の掛軸が残されている点です。中央上部には、4本の手に槍や法輪などの武器を持つ青面金剛が邪鬼を踏みつけ、香炉を手に持つ童子を従えた姿で描かれています。その上部には太陽と月、下部には青面金剛の使いとされる「見ざる・聞かざる・言わざる」の3匹の猿と、翌日が酉の日になることにちなんだ1羽の鶏が白・黒・青・黄の鬼とともに描かれています。この掛軸は、今も5軒の講員の皆様によって60日ごとの当番で持ち回りされており、60日に一度の庚申の日には寄り合い、掛軸を掛けてお供えをし、心経を唱えるお勤めが行われています。

東丹生図の庚申塔が建てられた時期は不明ですが、掛軸には明治28年（1895年）に修理をした記録があることから、少なくとも江戸時代後期に遡ると考えられます。各地で行われていた庚申の行事は、全国的にも衰退しており、東丹生図の庚申講はかつての民間信仰とその行事を今に伝えるものとして貴重なものです。



庚申塔（写真右）と掛軸（写真中央）

広告